

鹿児島県現代俳句協会会報

だからこそ俳句を

假屋園 いく子

五月、抜けるような青空をずっと辿つた東ヨーロッパの空の下、止まぬ紛争がある。人々のライフラインである橋、駅、病院、学校、住居までもことごとく破壊し瓦礫の山にしている。他の国々からの善意なる支援が更なる紛争への拍車となり、数知れないのが消されるという負の連鎖連日のようにテレビ、新聞などで放映され目をそむけたくなる地獄絵図そのものだ。俳句など作つていいのかと正直思つた。本棚の金子兜太の背表紙に惹きつけられるように手に取つた。代表作に「湾曲し火傷し爆心地のマラソン」がある。俳句を始めた二十二年前、とても難解な句であつた。被爆から十三年、長崎での作で、周辺の峠を越えてマラソンの一団がはしつて来たのだが、爆心部に入つたとたんたちまち肺が歪み焼けただれて崩れてしまつたという映像が浮かび上がつて出来たという。又、石寒太の評を紐解くと、「爆心地、長崎のマ

ラソンランナーに被爆者の痛みを重ねた一句です。この頃兜太はすでに社会性俳句を確立させていました。でも更にこの句ではことばのイメージとリズムで一気に戦争の傷痕を造形し新たな手法を構築しています。根底に原爆、戦争のあくなき憎悪があります」とある。周知の事と思うが、第二次世界大戦へ兜太は二十五歳、主計中尉として戦地に赴いている。トラック島捕虜時代、陸、海軍の有志を集めて句会を開いている。悪い戦況を少しでも明るくするためだつたと述べている。私が驚愕するのは足や首のない死体の傍らで兜太自身は主計中尉として

終わりの見えないウクライナ侵攻に兜太はどうのような一句を投じるだろうか。「震災・津波での死、戦争の死、それは人間の殺戮死です。これはいけない」残した兜太のことばをかみしめながらみじみそう思つた。

今、地球は、戦争、飢饉、伝染病、温暖化等々でかなり疲弊している。それらの殆どが人間の限りない欲望からうまれてゐると言つても過言ではない。その事は生きしていく上でとてもない不安要素となり益々地球の疲弊を強くしていく。その様な中において俳人として出来る事、それは、現実から逃げず、どの様な状況下であろうことばがあるかぎり句を生み出し続けていくことがすなわち戦禍で逃げ惑う人々の心に一步近づく事に繋がるのではないかと思う。

俳句を作る事イコール自分を見つめる事。視点は内界から外界へと向かい他国の諂いも他人事ではなくなつて来る。遠い戦禍の國の人々に一步近づく為に私は俳句を作り続けて行く。

第45号
2022・10月

発行人 高岡修
編集人 園田千秋
事務局 鹿児島市郡山町
〒891-1105 Tel (099) 二二五九一三
印刷所 有限会社アート印刷
〒891-1105 Tel (099) 二九八一四二八〇

令和三年度

鹿児島県現代俳句協会 新春俳句大会

令和三年三月五日
紙上俳句大会

投句数 七十八句

大会賞

春の泥なでれば光ることばの芽

南園 美基

優秀賞

陽炎の骨をあつめて焚いている

高岡 修

夢と書きわが毛筆は冬眠す

磯辺 正悟

山の水ゆつくり束ね春のみず

春田眞未子

薮つばき落ちて発火の時を待つ

秋山 青松

藤原 壽子

優秀賞

鹿児島県俳人協会賞
種子なべて水の言葉に火をともす

春田理恵子

篠原鳳作賞（大会賞）
風の鍵いっせいに解く曼珠沙華
鹿児島県現代俳句協会賞
体内的水の沸点終戦日

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇〇句

令和二年回

藤後左右忌俳句大会

令和三年六月二十日
紙上俳句大会

投句数 一〇〇句

大会賞

沈丁花この残り香を梳る

南園 美基

優秀賞

山下 久代

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

夏の溶岩青春がまだ囁つてる

南園 美基

優秀賞

百瀬 光里

小川 莎良

沈丁花この残り香を梳る

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

菜の花の香りにまみれ逃避行

南園 美基

優秀賞

松下 けん

小川 莎良

菜の花の香りにまみれ逃避行

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

月纏う体で書ける言語林

南園 美基

優秀賞

左右忌の象牙の冷ゆる聴診器

小川 莎良

月纏う体で書ける言語林

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

さえずりのペタルふみふみあげひばり

南園 美基

優秀賞

藤原 秋彦

小川 莎良

さえずりのペタルふみふみあげひばり

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

夏の溶岩青春がまだ囁つてる

南園 美基

優秀賞

百瀬 光里

小川 莎良

夏の溶岩青春がまだ囁つてる

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

菜の花の香りにまみれ逃避行

南園 美基

優秀賞

松下 けん

小川 莎良

菜の花の香りにまみれ逃避行

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

月纏う体で書ける言語林

南園 美基

優秀賞

左右忌の象牙の冷ゆる聴診器

小川 莎良

月纏う体で書ける言語林

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

さえずりのペタルふみふみあげひばり

南園 美基

優秀賞

藤原 秋彦

小川 莎良

さえずりのペタルふみふみあげひばり

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

父という寂しい兎が秋野へ翔んだ

南日本新聞社賞

優秀賞

暉峻 康瑞

小川 莎良

父という寂しい兎が秋野へ翔んだ

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

爆心地木馬が影を嘔吐する

南日本新聞社賞

優秀賞

磯辺 正悟

小川 莎良

爆心地木馬が影を嘔吐する

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

南日本新聞社賞

優秀賞

末吉 敬子

小川 莎良

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

島の雨罪を許して虹となる

南日本新聞社賞

優秀賞

磯辺 正悟

小川 莎良

島の雨罪を許して虹となる

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

南日本新聞社賞

優秀賞

末吉 敬子

小川 莎良

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

島の雨罪を許して虹となる

南日本新聞社賞

優秀賞

磯辺 正悟

小川 莎良

島の雨罪を許して虹となる

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

南日本新聞社賞

優秀賞

末吉 敬子

小川 莎良

渾身の碧の詩語ですゆすら梅

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

投句数 一〇八句

令和二年回

篠原鳳作忌俳句大会

令和三年九月十八日
紙上俳句大会

投句数 一〇八句

大会賞

島の雨罪を許して虹となる

南日本新聞社賞

優秀賞

磯辺 正悟

小川 莎良

島の雨罪を許して虹となる

高岡 修

藤後左右賞（大会賞）
喉の奥に溜めた言葉が夕焼ける
鹿児島県現代俳句協会賞
初螢きみの化身として抱く

高岡 修

紙上俳句大会

指宿市長賞

海の手のひらに載せます十六夜

山下 久代

優秀賞

日と月を自由にあそぶ雲の糸

春田眞未子

鳳作忌しづかな海の成長痛

南園 美基

石蹴りの友はまぼろし秋の空

酒匂 君江

虫の声終着駅の水を飲む

安楽与喜子

液体の月光を飲んで透きとおる

秋山 青松

点描の九月 肺腑がしんと透ける

坂元 良子

この地球にしばし腰かけ詩を紡ぐ

松下 けん

～～～～～～～～～～～～

安部知菜美

失望と吐息の横を春の川

秋の波数えることはもうやめた

假屋園いく子

川寄 弘子

春昼のクレヨン一本ずつ遅刻
マネキンの頭痛の中の青胡桃

磯辺 正悟

三日月は夢織り人に糸をだす
不条理と抜きつ抜かれつカタツムリ

市川 陽子

久保うめ子

空高く綿毛と共に重い春

泣いている街の輝きと赤い月

稻元 幽林

信念を持って生きるか霜柱
胸のもや切るに切れないさびたメス

浮津 智子

水無月の磨りガラスの遠い影
金木犀の一花香らず目を凝らす

水槽の藻のひそひそと犯す罪

宇都宮華水

アルタイルまでベランダ駅で切符買う

冬銀河はみ出た素数を受け入れる

小田府二子

春愁を束ねて閉じる手紙箱

秋風をこよりで綴じる夕暮れ時

小野田幸朗

小走りの気分がうれし春の風
浴衣着て亡夫の下駄も求めけり

金婚の歳を寿ぐ屠蘇となる
滻壺へ飛び込む水の眩暈かな

秋山 青松

倒壊した薔薇の漢字を建てなおす

ハビタブルゾーンの中の日常

速報は一本のヒガンバナ

桜井 光風

虫の夜に人類以後の音すこし

生は死の影であるかも天の川

愛甲 敬子

千鳥啼け左右の海にデモ帽子

この地球にしばし腰かけ詩を紡ぐ

坂元 良子

小走りの氣分がうれし春の風
浴衣着て亡夫の下駄も求めけり

山下 久代

虫の夜に人類以後の音すこし

生は死の影であるかも天の川

秋山 青松

倒壊した薔薇の漢字を建てなおす

ひまわりの合鍵を持つています

佐野ふみ子

徳森涼子

原之園厚子

幾千の花びら掃きて春送る
紫陽花と鼠色の空の密談

たんぽぽの絮遠い日々へと行つたきり
命がけで抵抗してくるソーダ水

ひらひらり落ち葉の数だけ待ちぼうけ
まち針で心の襞を手繰り寄せ

鮫島洋子

和田和子

春田眞未子

一〇二歳解き放たれて花柩
我が春のセピアのページ捲る日々

鮎つりの一人世界をたのしむの
翡翠色に染まりて私は夢の中

子ぐま座に風船ひとつ釣りあげる
日と月を自由にあそぶ蜘蛛の糸

下原培子

富迫吉博

春田理恵子

春夕焼黙つて包む人の死を
麦秋の鍵もつ真昼ドアがない

庭木には今朝もポツンと賜時間
菜の花の香りにまみれ逃避行

初螢きみの化身として抱く
足跡を残す砂浜左右の忌

末吉優子

富吉睦美

肥後洋子

この星の春や不穏のゆで卵
身の内の君は光よう・フランス

ため息は冬の海原を歩くため
オリオン座触れたい指と海の音

暁の月皎々と鶴容れて
下校の子容れて夕虹霧ごめる

園田千秋

西野康子

樋渡能定

花束の始まり二色のかすみ草
新涼の星砂の浜星の海

縫い目解く若葉の風に許されて
冬木立月の巡りに受胎する

零戦隼燃え落ちたのだこの氷湖
デイゴの花かつての戦火の色かたち

高岡修

橋口等

藤原壽子

反喻ぎみに初潮の蝶をしたたらす
鍵盤の波打ち際で死せる鳥

日月はむらさき曳けり忘れ貝
緑陰を悠然と過ぐシーラカンス

人語なき三角兵舎小鳥来る
春愁の真中ぽろんとオルゴール

田原ますみ

鳩野静香

堀口良子

日常の軽き足音二日かな
黒南風や流木どこか人に似て

セーターの裏目込み合う始発駅
切り取った風の形を空に貼る

すみれ草すみっこ好きかい僕もだよ
ふるさとは風に盜られて曼珠沙華

暉峻康瑞

鳩野大吉

北郷萌祥

手相見の手相見ている初鏡
心太つるりと愚痴も飲み込んだ

纖月に話しかけるも風が消す
幸せよ母の言葉を懷かしむ

春風に白き襟たて宙あおぐ
驟雨くる木々の香りの花宿り

松下
けん

桜闇ほんのり見えている終着駅
ちちははへ 言葉の筆 聖五月

山田 良子

六月号 南園 美基
六月の傷にひびいている震音

陽の光障子に描くメジロ歌
垣根越え鉄砲ユリのお出迎え

南園 美基

南園 美基

顔の流水光らせ朝の散歩道
春風は滑りやすいので音楽につかまる

若杉 凜

草ワナに転びて笑ふ白れんげ
ビワの実を天地丙と選る祖父の手よ

八月号 園田 千秋
秋のひがさあまがさ核の傘

耳成 保一

春深し十七音の器にも
風を出て風を呼び入る赤とんぼ

和田 明子

沖波の志布志へ碧き左右の忌
淡雪や星の吐息を聴くような

九月号 末吉 優子
月光をただ抉りたき銀の匙

宮永 武彦

きみといた遠い街角風光る
道の辺に投函されし夕落葉

和田 優子

跳ねて見せ子らの未来を雪うさぎ
花の舞い雨にも風にも負けました

十月号 末永 一雄
軍艦の影り遠くにコスモスゆれ

百瀬 光里

蛹らに羽化のスイッチ見つからず
空爆の焼死者焼きしあとへ 菊

和田 優子

「列島春秋」
(地区別現代俳句歳時記)

一月号 松下 けん

青鯫の大きな背鰭へ初日影

冬の蠅終末時計の針の音
はがいたいはがいたい春があるのだ

世界はまだその言の葉になつていない
幸せが償い合つてゐるふたり

山口 維心

梅雨晴れの土手にたなびく煙りは私
広い空を歩いた北の朝の木の葉

愛甲 敬子
きのふけふ明日あることを枇杷のはな
春愁を吐いては雲に置くきりん

二月号 肥後 洋子

紅梅のほころびホホと聲音して
有機体です花を愛で軋みます

五月号 本田万里子
花は捨て身上枝葉つぶやく老桜の
デ・ジャ・ビュむかし蛩であつた頃

山下 章江

雪やなぎ地平の夢を搔き鳴らす
火の山と氷河の出遇う白い薔薇

四月号 橋渡 能定

花は捨て身上枝葉つぶやく老桜の
春

二月号 肥後 洋子
二上山の峰に鞍おく春入日

雪やなぎ地平の夢を搔き鳴らす
火の山と氷河の出遇う白い薔薇

五月号 本田万里子
デ・ジャ・ビュむかし蛩であつた頃

第十二回 現代俳句の風より

『現代俳句年鑑2020』を読む

土田紫翠選感銘の一句
命奪ひ命を救ふ春の水

春田理恵子

秋山 青松

シャツ絞れば空青々としたたる

思い出もやがて色づく青蜜柑

冬の湖コイン落とせば沈みけり

愛甲 敬子

反抗期いつまで蛇衣を脱ぐ
黙といふ数多のことば秋の波

片桐基城選感銘の一句

ひとひらの秋をつまべば母の耳

末吉 優子

スプーンを選ぶ緑雨の銅婚式
あのねのね秋澄む夜の金平糖

(若林卓宣選感銘の一句)

〔評語〕あのねのね、おかあさん、よ

く聞いたことのある言葉。(中略)
おとうさんでもなく、ママやパパで
もない。おかあさんが一番にあつて
いるように思える。幼い子と何でも
受け入れて聞いてくれるおかあさん
とのお話は微笑ましい。金平糖には
やさしい甘さもあるのかも。

佐藤武子選感銘十句抄

落日の音が搔き出す秋の蝶

松下 けん

編集後記

◇協会報45号のお届けです。総会がコロナのために中止になつたので、巻頭の作者依頼ができなかつたこともあり、遅くなつてのお届けです。突然の巻頭依頼に応じて下さつた假屋園いく子さんには感謝致します。

◇令和4年度の会費は、昨年度に引き続
き銀行振り込みでお願いします。

取引支店 鹿児島銀行星ヶ峰支店

店番

144

口座番号 227070

名前 カゴシマケンゲンダイハイクキヨウカイ

会計 園田 千秋

末吉 優子

中島勝子選感銘十句抄

文明はガラスの破片雪こんこん

暉峻 康瑞

枇杷の種子ごろり生者の側にある
聴くといふ祈りあるべし星月夜